

よみがえる田村遺跡群

—発掘調査の成果から—

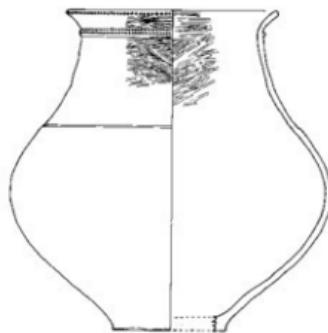


昭和62年3月

高知県教育委員会

よみがえる田村遺跡群

—発掘調査の成果から—



昭和62年3月

高知県教育委員会



最古のむらの方形堅穴住居址



最古のむらで使われた土器

巻頭カラー 2



稲作が最初に行われた水田址



出土したたくさんの石包丁



祭りに使われた鏡片



焼け落ちた住居址

卷頭カラー 4



中世の環濠屋敷跡と井戸



出土した輸入磁器(中国産の青磁)

序

昭和54年度から実施してまいりました田村遺跡群の発掘調査も、昭和60年度をもって完了し、報告書も刊行されました。

発掘調査では、縄文時代から近世にいたる各時代の多様な遺構、そして300万点におよぶ多量の遺物が発見されました。中でも、弥生時代の村と水田の跡、中世の屋敷跡などは、全国でもきわめて貴重なものであり、注目を集めています。

このような調査成果は、調査期間中にも新聞等により広く報道され、報告書も刊行されました。今回、一般の方々にもよりわかり易いものとするために、本書を編集し、発行することになりました。

今後も、開発工事等に伴い遺跡の発掘調査が増加すると思われますが、国民共有の財産として、埋蔵文化財を後世に残すためには、県民のみなさまの御理解と御協力を欠かすことはできません。

本書が、県民のみなさまに読まれることにより、田村遺跡群の成果を通じて、古代人の生活の息吹を感じ、埋蔵文化財への理解を深める一助となれば幸いです。

昭和62年3月

高知県教育委員会

教育長 中澤秀夫

凡　例

1. 本書は、田村遺跡群発掘調査報告書をもとに、その成果の概要をまとめたものである。
2. 使用した図面、写真等は、田村遺跡群発掘調査報告書から転載した。
3. 本書の撮影は、高知県教育委員会文化振興課が行った。
4. 出土遺物等の資料は、高知県教育委員会文化振興課で保管している。

目

次

はじめに	1
田村遺跡群の発掘	3
I 発掘調査のあらまし	3
田村遺跡群とは	3
調査の方法	3
遺跡の保存	5
II 発掘の成果	11
縄文時代	11
弥生時代	13
1 稲作開始の時期	14
2 弥生文化発展の時期	25
3 すまいとむら	33
4 道具とくらし	35
5 まつりと信仰	42
古墳時代	47
古代	49
中世	52
1 中世とは	52
2 中世の田村	53
3 中世の遺構と遺物	55
近世	65
卷末資料	68

は じ め に

高知県では、今まで発掘調査などにより縄文時代から室町時代までの遺跡だけでも約1360箇所も確認されています。これらの遺跡から出土する遺物は、はたして私達に何を語りかけているのでしょうか。

たとえば土器は、多くの場合細かく割れた状態で出土します。その破片も何百年、何千年の間土に埋もれていたため、もろくなっているものが多く、土器ができた当時の形で出土することはまれです。出土した土器に対してその形や文様の美しさに心をひかれる人が多いかも知れませんが、土器の価値は美しさではありません。その土器が、どのように作られたのか、何に使われたのか、また土器を作った人々はどんな生活を送っていたのか、社会の仕組みはどうであったのか等々、ひとつひとつの土器が、現代の私達に伝えてくれる、無言のメッセージが大切なのです。

弥生土器にみられる刷毛目や叩目（32ページ参照）などのあとは、金属器が使用されたことを知らせてくれます。つまり、弥生土器を作るための工具のうち、刷毛目や叩目をつける板は、鉄器を使用して木を割り、溝をつけることによって作られたものなのです。



眠りからさめた中世の屋敷跡の上を現代文明のシンボル飛行機
が飛ぶ。

日本中にある遺跡をすべて保存できたなら、すばらしいことだと思います。遺跡の保存の方法は、本来これを発掘しないでそのまま残すことです。しかし、すべてをそのまま保存して後世に伝えることは不可能です。

田村遺跡群も高知空港の滑走路延長工事によって、現状のまま保存できない部分があるために、県教育委員会によって昭和54年度から発掘調査を実施し、記録に残して保存することになりました。その結果、弥生時代と中世の2時期を中心として、縄文時代から江戸時代までの約300万点におよぶ土器や石器などの遺物が出土し、244枚の水田址、おびただしい住居址等の遺構が発見されたのです。これらは、すべて、どこの地点で、地下どれ位の深さの所に、どんな形で埋っていたのかを精密に、しかも慎重に記録しました。このようにして、何十年、何百年先の人々にも、田村遺跡群のすべてが詳しく分かるように記録に残し、15冊におよぶ「田村遺跡群発掘調査報告書」が出来上りました。

しかし、これは考古学の専門家により記述されたものであり、皆様には、やや難解な内容と考えられますし、ページ数も莫大なものです。そこで、これらをできるだけ平易に解説し、発掘された田村遺跡群の全貌が手軽につかめるように工夫して、この小冊子を編集して発行することにしました。

国民共有の財産である埋蔵文化財も、高知県民がまずその重要性を認識することから始まると思います。田村遺跡群が、私達の先祖の文化遺産を代表する価値ある文化財であることを誇りに思い、かつそれを大切に保存・活用していくことによって現代に生かしていくことが私達の務めであると言えましょう。

この冊子が、広く県民の方々に読まれ、文化財の大切さに対する御理解を頂き、ひいては文化財愛護のための諸活動に参加していただけるとしたら、我々のささやかな願いが、十分にかなえられると考えます。



掘り出された弥生土器

田村遺跡群の発掘

I 調査のあらまし

田村遺跡群とは

田村遺跡群は、高知県最大の遺跡です。これも、発掘調査が行われてこそ、わかったことです。ではなぜ、田村遺跡群の発掘調査を行わなければならなかつたのでしょうか。

田村遺跡群は、高知県の中央部、高知市から東へ12kmの物部川の河口近く、旧高知空港の西隣りに位置しています。この付近では、以前からたくさんの遺跡の存在が知られており、埋蔵文化財の宝庫でした。高知空港は、それまで滑走路が1,500mしかなく、ジェット機の離発着ができませんでした。そこで、滑走路を延長することになりましたが、その拡張範囲の中に、田村遺跡群が含まれてしまいました。滑走路の造成工事を行うと、当然遺跡がこわされてしまいます。そのため、工事にとりかかる前に、工事の範囲に含まれるすべての遺跡の発掘調査を行い、写真や図面などによる詳細な記録を残すことにより、いつでも遺跡を復元できるようにしたわけです。

発掘調査により、発見された多種多様な遺構、遺物は、整理作業の後、その内容について研究されました。その結果、高知県の歴史を語る新しい事実がたくさん発見されました。これらの事実から、私達の祖先の姿、そして、かれらの生活、信仰など目に見えない世界を描き出すことができます。特に、まだ文字が伝わっていない時代の世界を知るために、考古学による研究しかありません。考古学は、直接『もの』を調査・研究することにより、歴史を調べる学問です。発掘調査により発見された遺構や遺物から、その『もの』を使った人間を探り、そして当時の社会を知ることができます。さらに、古墳時代以降の文字のある時代でも、書物に書かれてもなお不明な部分や書物に書かれなかった当時の人々の生活を具体的に現わすことができます。

発掘調査の方法

では、このように重要な発掘調査は、どのようにして行われるのでしょうか。田村遺跡群の例をみながら、次に述べてみましょう。

田村遺跡群は、先に述べたように高知空港の拡張整備事業に伴う発掘調査でし



1	田村遺跡群	11	立田平杭遺跡(弥生)	21	立田土居城跡
2	蒲山古墳群	12	田村上細工漸遺跡('')	22	深瀬城跡
3	小蓮古墳	13	大埴岡町出遺跡(銅輝出土地)	23	下田土居城跡
4	船岩古墳群	14	正善遺跡('')	24	鯛森城跡
5	土佐國分寺跡	15	カリヤ遺跡(銅矛出土地)	25	細川土居城跡
6	比江庵寺塔跡	16	錦城遺跡('')	26	栗山城跡
7	五軒屋敷遺跡(弥生)	17	長崎遺跡('')	27	片山土居城跡
8	農業高校遺跡	18	岡豊城跡	28	蚊居田土居城跡
9	ヒビノキ遺跡(弥生)	19	岩村土居城跡	29	田村城跡
10	大篠遺跡('')	20	町田土居城跡	30	千屋城跡

第1図 田村遺跡群の位置と周辺の遺跡

たので、調査した面積も約14万m²と広大なものでした。この面積は、空港拡張範囲の中で、調査対象地とした西半部、約30万m²の半分にあたり、遺跡の密度が非常に高かったことがわかります。また、遺跡が広範囲におよんだので、その名称も大字をとり、すべてをまとめて田村遺跡群と呼ぶこととしました。

発掘調査の期間は、昭和55～58年の4年間にわたりました。雨さえ降らなければ、灼熱の太陽が降り注ぐ夏も、寒風吹きすさぶ冬も、1日平均120人にのぼる作業員によって発掘作業が行われました。現場での作業が終了した後も、昭和58～60年の3年間に、調査員を中心として30人近くの作業員により、整理作業と報告書の作成が行われました。その結果、15冊にものぼる莫大な報告書が刊行されたわけです。

発掘調査では、正確な記録を残さなければなりません。そこで、測量用に調査対象地に対し、磁北を基準とする方眼をつくります。この方眼をグリッドと呼び、田村遺跡群では、100m、20m、4mと大、中、小の3種類がつくられました。そして、4m四方のグリッドを調査の最少単位として試掘調査を行い、遺構、遺物が発見された場合には拡張して全面発掘を行いました。その結果、田村遺跡群では、48ヶ所の調査区が設定されました。

発掘作業の大部分は、人力によって行われます。ブルドーザーやパワーショベルのような大型の機械では、出土する土器をこわしたり、小さな石器などが発見できません。まず、表土を剥ぐときは、スコップを使います。次に、発見された住居址などの遺構を掘る場合には、中から何が出てくるのかわかりませんので、小さな移植ゴテや竹べら、ハケなどで慎重に少しづづ掘り下げていきます。そうすると、当時の人々が使い、捨てたままの姿で、土器や石器が現われてきます。この瞬間こそが、発掘調査の中で最も感動を覚える時です。調査現場で土器を手に取ると、まさに、幾百年もの時の流れをとび越えて、現代によみがえる古代人の息吹を感じることができ、いつのまにか、過去へとタイムトンネルをくぐりぬけ、当時の人々の中にいるような気さえしてきます。

遺跡の保存

しかし、発掘調査は、このような感動を得る場面ばかりではありません。その裏には、いろいろな苦労があります。開発工事に伴う発掘調査の場合は、まず、時間との戦いです。だんだんと工事の期限が近づいてくると毎日の休み時間も返上しての調査が続きます。さらに、天気との戦いもあります。雨が降ると調査区

発掘調査の手順



表 土 剥ぎ

発掘調査の手順としては、まず表土剥ぎから行います。

地表下の浅いところに遺構、遺物がある場合には、人力によりスコップで表土を剥ぎます。逆に深い場合にはユンボなどの機械力が使用されます。



遺 構 検 出



遺 構 発 掘

遺構が検出されると、慎重に掘り下げていきます。何千年も地中に埋っていた土器は非常にもらいので、竹べら、ハケなどで少しづつ掘ります。土器や石器が次々に姿を現わし、発掘のハイライトです。

掘り出された遺構や遺物は記録に残さなければなりません。写真、図面により、土器の出土状態や遺構を記録していきます。地味な作業ですが、発掘の中では最も重要な作業です。



測 量



第2図 調査区設定図(Loc 1~48)



田村遺跡群の航空写真

田村遺跡群は物部川の自然堤防上に立地しており、空港の西に広がっていました。

に水が溜り、一面が大きな池のようになり、ポンプで水を汲まなければならず、その間は作業中止です。それでも、調査が最後に近づくと、土砂降りの雨の中、必死の調査が行われます。

しかし、このような苦労は、何でもありません。発掘調査の中で、最も悲しいことは、調査の終了とともに眼の前で遺跡がこわされることです。—いろいろな苦労の中で、新しい発見の感動を与えてくれた遺跡。そして、今我々の手で、長い眠りからよみがえり、遠い過去の無言のメッセージを伝えてくれた遺跡—その遺跡が、ブルドーザーの下になり、しだいに土の中に埋っていく姿は、助けを求めているようにもみえます。そんな遺跡の姿をみると、なんとか、発見されたままで残せないものかと祈るような気持になります。

田村遺跡群では、主な調査区の発掘が終了すると、その成果を広く理解するために、現地説明会が行われました。説明会は、回を重ねる度に盛んとなり、参加人数も増え、最後の説明会には、千人以上の人々の参加がありました。このような動きの中から、田村遺跡群を保存し、後世へ残そうとする機運が生まれ、「田村遺跡を守る会」も発足しました。そして、強い要望のもとに市議会、県議会へ保存のための請願が出され、採択されたのです。

その結果、弥生時代の水田址の切取り保存が行われました。田村遺跡群のすべてが滑走路の下に埋ってしまった今、この水田址が、私達の目でみえる遺構として残されたのです。これも、現地説明会などの機会に遺跡を実際に見ることによって、その大きさを理解していただいた人たちの努力の結果です。遺跡を守っていくためには、こうした県民全体の埋蔵文化財に対する理解が不可欠です。ひとりひとりの保存への小さな努力が大きな力となり、高知県の歴史を知る上で欠くことのできない貴重な遺跡を、後世へ引継いでいくことができるのです。



一面プールのようになった発掘区



切り取られる水田址



現地説明会

現地説明会は、調査が終了すると行われます。最後の現地説明会では、1,000人以上のみなさんの参加があり、田村遺跡群への理解を深めました。



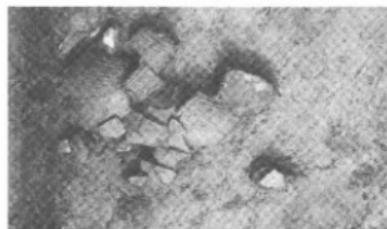
住居址の埋戻しによる保存
発掘調査終了後には、住居址などに砂を入れ、保存が行われました。

II 発掘の成果

さて、次に田村遺跡群では、どのようなものが発見され、どんなことがわかったのでしょうか。弥生時代と室町時代を中心として、縄文時代から江戸時代までの300万点におよぶ出土遺物と、住居址、土壙、溝、井戸などの遺構から、それぞれの時代の人々の暮らしを探ってみましょう。

縄文時代

田村遺跡群で発見された遺跡のうち最も古いものは、縄文時代後期に属するものです。縄文時代は、土器の研究によって、草創期・早期・前期・中期・後期・晚期の6時期に分けられています。最も古い草創期は、いまから約12,000年も昔であり、縄文時代はそれ以後10,000年にもおよぶ長い時代です。今回、発見された後期という時期は、縄文時代の中でも後半、約3,500年前にあたります。縄文後期の遺物が発見された場所は、空港拡張範囲の西端部ですが、道路と水路の改修工事に伴う調査であったため、幅7m、長さ50mほどの細長い調査区でした。遺物が発見されたのは、地表下50cmの黒褐色の粘質土であり、この50cmの土層の間に3,500年間の歴史がつまっているのです。また、遺物の出土状態からみると、



上流から流ってきたものではなく、この場所で捨てられたものであり、その範囲は調査区の西側へ広がっています。ですから、今回の調査では、住居址などの遺構は発見されませんでしたが、西側には当時の集落が存在しているのではないかと考えられます。



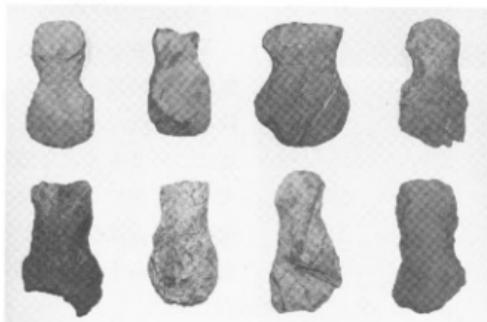
縄文土器と打製石斧の出土状態

発見された遺物は1,500点にのぼり、このうち土器は1,400点、石器は100点が出土しました。これらの土器の表面を洗うと、小さな縄目の跡をみることができます。この縄目の文様が縄文であり、縄文土器という名称のもとになっています。ところで後期の土器には、縄文を磨消して文様を形作るものが多くあります。こ

それを磨消繩文土器と呼び、この時期には瀬戸内地方を中心として西日本に広くみられます。その他には、ヘラで深く線を刻んで文様を描いた土器、文様のない無文の土器なども出土しており、これらの土器の組合せ、文様の形からみればやはり瀬戸内地方からの影響を受けていることがわかります。

石器には、石鎌、石斧、石錘などがありました。石鎌は石の矢じりであり、鹿や猪などの動物を狩っていたのでしょう。石斧は、石を磨いて作った磨製石斧と打ち欠いて作った打製石斧があります。磨製石斧はするどい刃をもっており、斧としては使ません。しかし、打製石斧は刃の形も粗雑であり、斧としては使えません。では、打製石斧は何に使用されていたのでしょうか。今までの研究からみると、土を堀る道具である石鎌として使われていたようです。ですから、今回の打製石斧も粗く、たくさん作られていますが折れたものも多く出土しているのです。そして、当時の人々は、この石鎌を使い、クズ、カタクリ、ワラビなどの地下茎を掘り出し、食糧としていたと考えられます。石斧について出土量が多いのは、石の錘である石錘です。この石錘は、魚を取るための網用の錘であり、物部川でのアユ漁などに使われていたのではないかと考えられます。

同じ繩文時代でも、後期になると、石鎌である打製石斧や石錘の出土量が非常に増えます。これは、木の実の採集や狩猟だけではなく、根茎類の採集や漁撈が盛んになったことを示しています。そして、繩文中期（約2500年前）までの遺跡が山間部に所在していたのに比べ、より安定した食糧確保の道がひらけたことによって、田村遺跡群のような低地でも生活を営むことができるようになったのです。



打 製 石 斧
土掘り具である石鎌として使われたと考えられます。

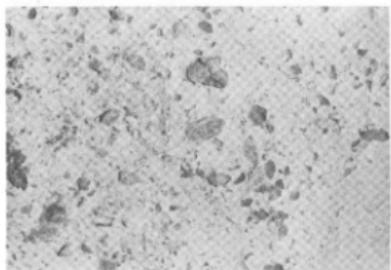
弥生時代

今から2,200年ほど昔、朝鮮半島から稲作と鉄や青銅の金属器をもった文化が日本へ伝わりました。これが弥生文化です。弥生時代は、2,200年前からの約500年間であり、やはり土器の形などから、前期、中期、後期の3時期に分けられています。

さて、弥生文化が伝わったということは、単に稲作の技術、新しい道具が日本にもちこまれたということだけではなく、稲作を中心とする社会のしくみができるあがったことを示しています。

たとえば、水田を開き、水路を引くためには、多くの人々の協同作業が必要です。また、収穫した米を管理し、村人達に分けるためにむらを治める人（首長）^{しゅろう}が生まれ、その首長を中心として、豊作を祈るための新しい祭りも始まりました。そして、稲作技術が進み、社会が豊かになると、水田と青銅や鉄の新しい道具の獲得をめぐり、激しい戦いがおこり、その結果、力をもったむらは、いくつかのむらを統合して小国家が生まれました。これが「くに」の始まりです。小国家はさらに統合され、時代は古墳時代へと移っていきます。

このような歴史の流れをみると、弥生時代は、日本という国が誕生するための重要な準備期間であったともいえます。



出土した弥生土器とモミガラの跡

そして、日本(邪馬台国)^{やまとこく}の地理、社会、風俗などが初めて中国の書物(「魏志」「倭人伝」)に現われるのもこの時代であり、まさに日本が世界史の舞台に登場した時代といえます。

今回調査が行われた田村遺跡群では、弥生時代前期から後期にかけての変化の跡を連続的にたどることができ、その内容についても豊富な遺構、遺物から復元することができました。このように田村遺跡群は、高知県、ひいては日本の弥生文化を知る上で欠かせない重要な遺跡なのです。

では次に、前期、中期、後期について時代を追ってみてみましょう。

1 稲作開始の時期（前期）

稲作を始めた頃、人々はどのような生活をしていたのでしょうか。縄文時代の食糧を採集する生活から、弥生時代の食糧を生産する生活への変化は、それまでの歴史の中では最も大きな変化であり、人々の暮らしにも大きな違いがあったはずです。弥生時代でも中期や後期は、全国でもたくさんの遺跡が調査され、人々の生活、むらの様子など比較的多くのことがわかっていますが、前期については、まだ多くの謎が残されています。ところが、田村遺跡群の発掘調査によって、多くの謎が明らかになったのです。しかも、前期の中でも最も古い時期に属するむらの全体を発掘することができ、これは全国でも唯一の例です。

最古のむら

この最古のむらは、田村遺跡群の南半部で発見されました。むらの占める面積は約27,000m²と広く、標高6～7mの自然堤防上に立地しています。

むらの中からは、竪穴住居址と掘立柱建物址（33ページ参照）の二種類の住居址が発見されました。竪穴住居址は10棟検出されました。その形には円形と方形の二種類がみられ、大きさも直径8m以上の大型のものと、3mほどの小型ものがあります。大型の竪穴住居址には、中央部に構造的穴（ピット）があり、その両脇に小穴が付属しています。中央部の穴からは、砥石や石斧が発見されており、工作用に使われたと考えられます。このような住居址の構造や方形の住居



最古のむらと水田址

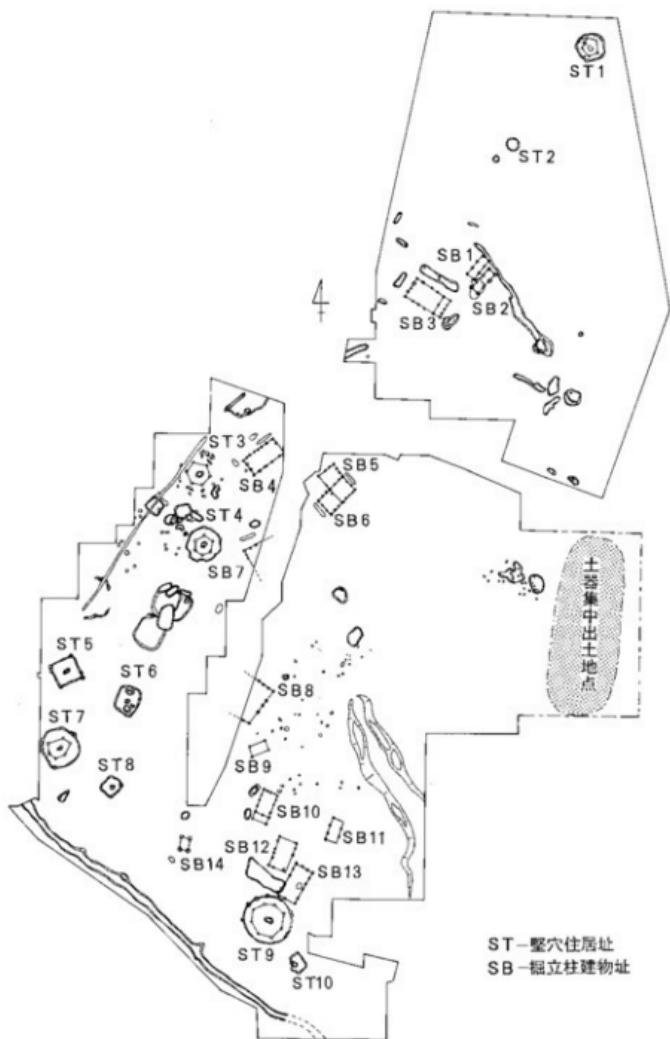
址などは、縄文時代の住居址にはありません。ところが、朝鮮半島南部の扶余というところに松菊里という遺跡があり、その住居址とよく似ています。これは、農耕文化を伝えた渡来人や中国大陆とのつながりを考える上で、きわめて興味深いことです。

掘立柱建物址は、15棟発見されましたが、この中で住居址と考えられるのは、9棟です。大きさは、 $6 \times 12m$ ほどで、4～5本×6～7本の柱により建てられています。柱の太さは20cmほどであり、その間隔は約1.2mです。今までの研究では、このような掘立柱建物の住居が本格的に登場するのは、古墳時代以降であり、今回の発見は大きな問題といえるでしょう。また住居以外には高床式の倉庫と考えられる掘立柱建物址が3棟あります。この建物は、 $1 \times 1 \sim 3$ 間と住居址に比べ小型ですが、柱の太さは30cm以上であり、この点からみれば高床式であったことがわかります。

竪穴住居址と掘立柱建址は、むらの中央部を囲むようにして建てられています。掘立柱建物址は内側に、その外側には竪穴住居址が整然と並んでいます。さらに竪穴住居址は大型と小型のものが、約8mの間隔をおいて、一対となっています。



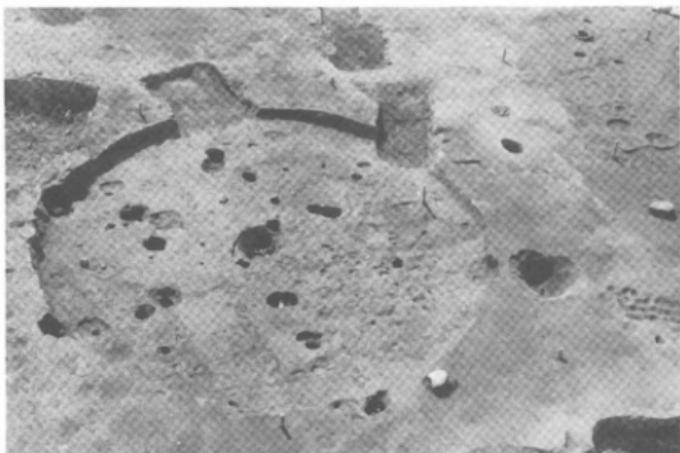
最古のむらの姿



第3図 最古のむらの全体図 (S=1/1200)
中央部に広場をもち、それを囲むように堅穴住居址と掘立柱建物址が並んでいます。

た。これは1棟の堅穴住居が独立した単位ではなく、2棟一組が当時の人々の生活の中での住居の単位として使われていたのではないかと考えられます。

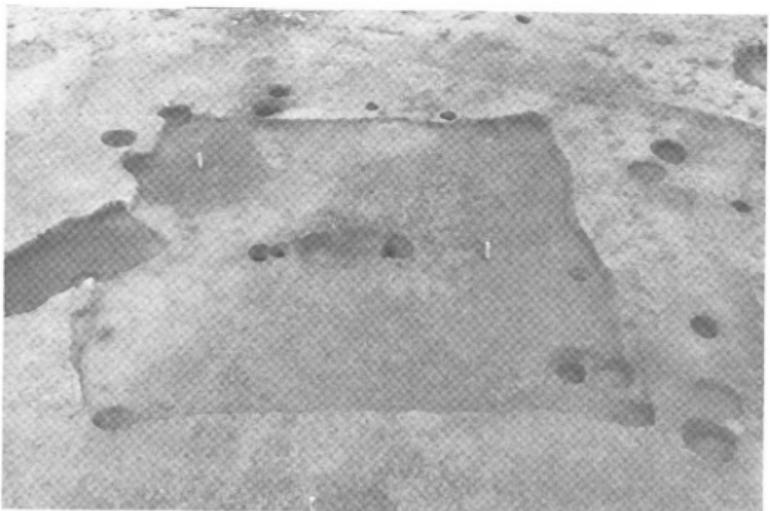
これらの住居のまわりには、稻などを貯えるための穴倉や、高床式倉庫がみられます。穴倉や倉庫が各家のものではなく、むらのものであったことを示しており、収穫された稻は村人達全員のものであったことがわかります。むらの東端部では、土器片が集中して出土しました。これは、弥生人たちが割れた土器などをまとめて捨てた場所であり、当時のゴミ捨て場と考えられます。また、中央部は、広場になっており、ここでは、首長を中心としてさまざまな祭りが行われていたのではないかでしょうか。



円形の堅穴住居址

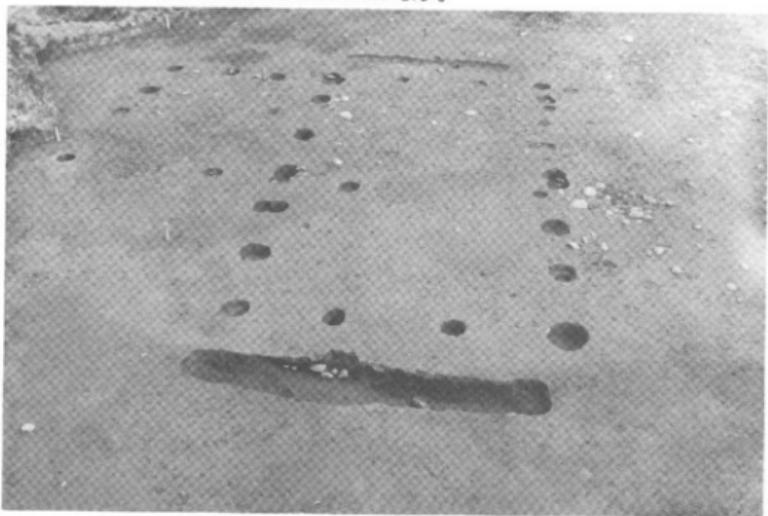
直径7.2m深さ30cmであり、中央部のピットを囲み6個の柱穴があります。柱穴のひとつからは右の写真のように完形の土器が出土しました。





方形の堅穴住居址

一辺の長さは5~6mで四隅に柱穴があります。やはり中央部にピットが掘られ、砥石などが出土しています。



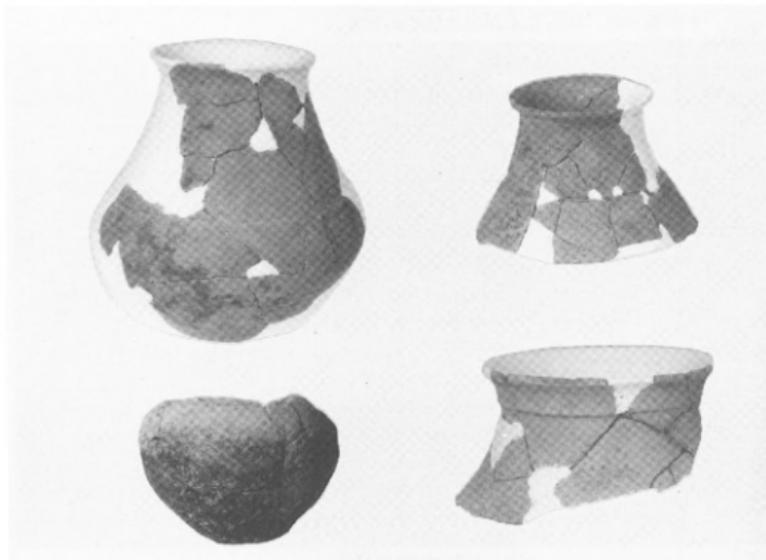
掘立柱建物址

太さ20cm前後の柱で建っており、2棟が重っています。

次に、このむらから出土した遺物についてみてみましょう。最も多く出土したのは、やはり土器であり、県下で最古の弥生土器ということができます。中でも甕が非常に多くみられ、その作り方は、弥生土器ですが、形には縄文土器の特徴が残されています。つまり弥生土器と縄文土器とをつなぐ土器であり、弥生土器の成立を知る上で非常に重要な資料といえます。

石器にも、太形蛤刃石斧や石包丁（37～38ページ参照）磨製石鎌など稻作とともに朝鮮半島から伝わったものがたくさんみられます。また扁平な形をした石鎌のような打製石斧が出土しており、やはり縄文時代から弥生時代への変化をみることができます。

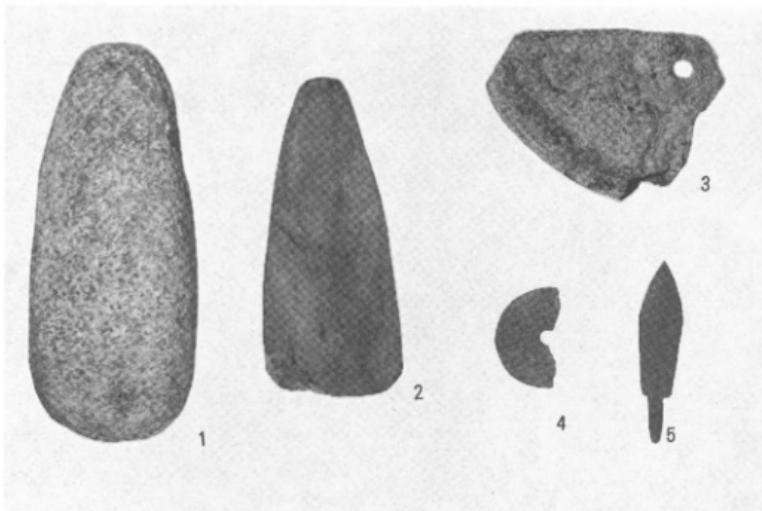
太形蛤刃石斧は、物部川で取れる石材を使っており、未完成品も多く出土しているところから、高知で作られたことがわかります。ところが石包丁には未完成品がまったく発見されません。そして石包丁に使われる石材は北部九州で取れます。このことは、石包丁が北部九州で作られ、田村遺跡群へ持ち込まれたことを示しており、高知の稻作伝播のルートを知る上で、きわめて重要な発見といえます。



弥生時代前期の壺



弥生時代前期の壺



弥生時代前期の石器

(1・2 磨製石斧, 3 石包丁, 4 石製紡錘車, 5 磨製石鎌)

水田址

最古のむらの北にある低地からは、前期の水田址が発見されました。出土遺物が少なくこの水田が最古のむらの人達によって開かれたものであるとは断定できませんが、前期に使われていたことは間違ひありません。水田の面積は、確認された部分だけでも $5,500\text{m}^2$ の広さをもっており、244枚の小さな区画に分かれています。水田一枚の面積は、最も小さいもので 2m^2 、最大のものでも 20m^2 と、今日の水田と比べれば非常に小さな区画です。では、なぜこのように小さな区画の水田になったのでしょうか。やはり稲作技術が未熟であり、小人数の村人たちの力では、大規模な水田の造成、水路の掘削などができるなかったためではないでしょうか。

この水田からは、どれほどの収穫があったのでしょうか。当時は、 $1,000\text{m}^2$ の水田から約30kgの米が穫れたと推定されているので、全体では約 165kgになります。この米では、村人全員の食糧としては不十分です。ですから、稲作を行いながらドングリなどを貯えて、不足を補っていたのでしょうか。

また、水田からは、弥生人の足跡が 100個ほど発見されました。足跡からみると、当時の人々の身長は約 160cmほどと推定されており、大小が並ぶ足跡からは親子連れの歩みが想像されます。



弥生時代前期の水田址



第4図 水田址全体図

小さな谷状の地形を利用し、1辺の長さが2~6mほどの小さな水田がつくられました。



水田面に広がる足跡



大地を踏みしめた足跡

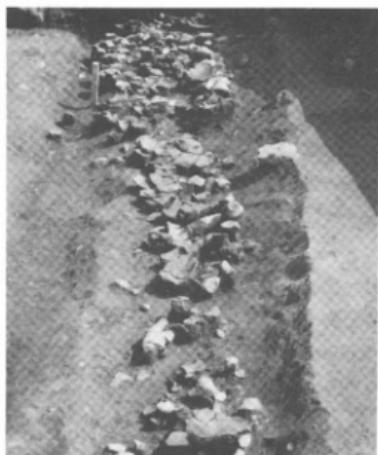
むらの移動

最古のむらは、50年ほどたつと 500mほど北の場所へ移ってしまいます。この一帯は、「西見当遺跡」と呼ばれ、以前にも一部が調査され、むらの存在が知られていきました。今回の調査では、このむらの姿をさらに詳しく知ることができます。

このむらには周間に大きな溝が巡らされており、考古学ではこのようなむらを環濠集落と呼んでいます。この溝は、幅1.5m、深さ1mほどもあり、溝に囲まれたむらの面積は約14,000m²です。溝は黒い粘土で埋っており、中ほどからは多量の土器が出土しました。溝に水が流れていれば、底に砂が溜るはずですが、砂はありません。これは環濠が水のない空堀であったことを示しており、むらの範囲を明確にするとともに、むらとむらの外とを区別するために掘られたものと考えられます。

環濠の中から出土する土器には、すでに縄文的特徴はみられません。これは土器だけの変化ではなく、農耕社会が定着し、弥生文化が完全に整ったことを表わしています。

環濠集落も次の段階になると環濠が埋められ、むらは外へと広がります。しかし、このむらも長くは當まれずに、また他の場所へ移動してしまいます。



西見当のむらを巡る環濠と出土遺物



西見当のむらからわかれた小さな村



西見当のむらと西見当から分かれた分村の土器
(1 壺—西見当のむら出土、2~4 壺、5 壺一分村出土)

前期の中でも最も新しい時期になると、県下の各地に水田が開かれ、弥生のむらが広がっていきます。その中のひとつのむらが空港拡張範囲の東端部で発見されています。このむらの規模は小さく、占める面積も 3,000m²ほどであり、竪穴住居址 4 棟と土壤からなっており、環濠はんりもありません。これは、最古のむらや西見当のむらのように、中心となる大きなむら(母村)ほそんから分かれたむら(分村)ぶんそんなのです。

この頃になると、各地のむらの間にも力の差がみられるようになり、広い水田と多くの鉄器をもつむらを中心とする集団が出現します。そして、四国、中国、九州、近畿など各地域の特色が現われ、次の中期へと発展していきます。

2 弥生文化発展の時期（中～後期）

中～後期は、弥生文化が花開き、そして古墳時代へと発展する約400年の期間です。中～後期の変化と発展の姿を、発掘された遺構と遺物からみてみましょう。

中～後期のむらは、空港拡張範囲の北西部を中心に発見されました。しかし、今回調査されたのはむらの一部であり、その半分以上は調査区の北と西に広がっています。むらの中からは、前期と同じく、竪穴住居址と掘立柱建物址、土壙、溝などが検出されています。竪穴住居址は、30棟が掘り出されました。互いに重なり合っていたり、そばに並んでいます。このような状態からみれば、すべての住居址が同時に使われることは不可能であり、住居の建てかえが行われていたことがわかります。このむらは、住居址から出土する土器などからみれば、4～5回の建てかえが考えられ、同じ場所で継続的にむらが営まれた結果、30棟もの住居址が発見されたのです。竪穴住居の建てかえの原因は、住居の耐久性、焼失などが考えられます。1棟の住居が何年間にわたり使われたのかは難しい問題ですが、住居址から発見される土器の違いからみれば、約20年間ほど使われたと考えることができます。

住居址の中には、焼失のために捨てられたものが数棟発見されています。これ



中～後期のむらの全景



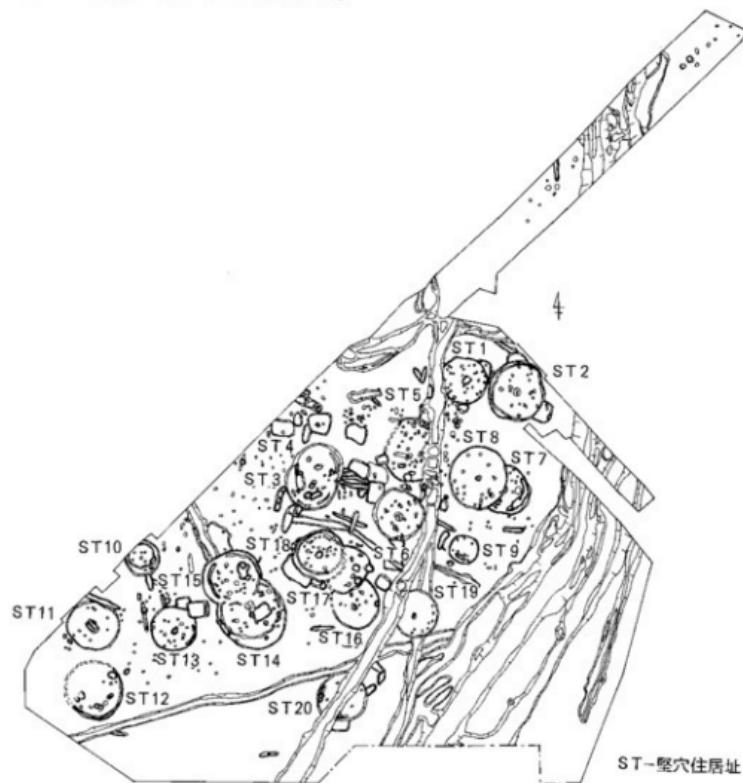
焼け落ちた住居址
住居址の床の上には、一面に焼けた木材などの炭が発見されました。

らの住居址は、掘り下げていくと埋った土の中から、炭や焼土が発見されます。そして、床からは、屋根や柱の木材などが焼け落ちた状態で出土します。中には掘り込んだ壁にそって焼けた板材が発見される住居址もあり、竪穴住居の壁は板材でおおわれていたようです。焼け落ちた原因を示すようなものは発見されていませんが、おそらく炉の火などによる失火、そして類焼によって焼け落ちたと考えられます。また、焼失住居が多く発見される場合には、失火ではなく、むらとむらとの戦いにより焼き討ちを受けたと考えられます。

竪穴住居址は、直径5~6mの円形のものが大半を占めていますが、中には直径8m以上の特に大型の住居址もみられます。この住居址は、2棟分が重複しており、完掘するとダルマ形をしています。また、住居址の一部は、三日月状に高くなっています。ベッド状遺構と呼ばれています。ベッド状遺構の用途は、名前のようにベッドとして使われたものではなく、発見される遺物からみれば、住居の中で祭りなどを行った特殊な場所であったと考えられます。ベッド状遺構は他の住居址ではなく、この大型住居だけに発見されています。さらに、住居址中央部の穴からは、現在のネックレスのような首飾りに使われた勾玉や、管玉まがたまが出土しており、大きさ、ベッド状遺構の存在と合わせて考えれば、むらの中心人物であ

る首長の住居ではないかと思われます。

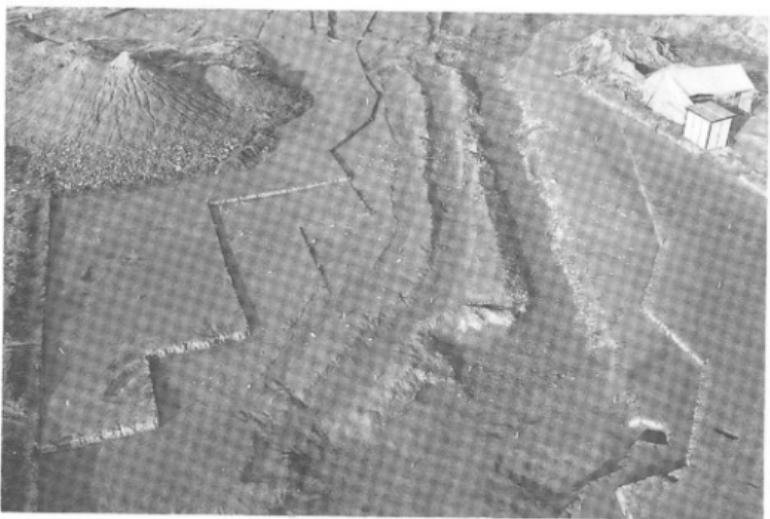
むら全体の大きさは、一部しか調査されていませんので不明ですが、遺構の広がりを考えれば、30,000m²ほどと推定され、巨大なむらの姿が浮び上ってきます。住居址群のすぐ東には、幅5m、深さ2mほどの大きな溝が発見されました。この溝は、北東から南西へと走っており、多量の砂で埋っていることから、常に水が流れています。どうやら物部川の旧河川の支流のひとつであったようです。むらの範囲は、この旧河川を境界としており、旧河川の東からは、住居址の発見はありませんでした。



第5図 中～後期のむらの全体図 ($S=1/600$)
空港拡張範囲の北西部で20棟の堅穴住居址が発見されました。むらはさらに、北と西へ広がっています。



むらの中で最大の堅穴住居址（S T 14・15）
直径8mの住居址2棟が重っており、上方にはベッド状遺構がみられます。



物部川の旧流路の跡
中～後期のむらの東にはこの旧流路があり、むらの東の境界となっていました。

むらの北側では、道路と水路の改修に伴う細長い調査区から、祭りに関係すると考えられる遺構と遺物が、集中して発見されました。土壌のひとつからは、壺、甕各1点と高杯^{たかづき}2点（35～36ページ参照）が横に寝かされた状態で、まとまって出土しました。残念ながら、今の水田の直下でしたので、耕作により半分ほど削り取られていきましたが、残りの部分は、そのままの形で残されていました。これらの土器は、祭りに使われた後に、まとめて埋納されたのでしょうか。さらに、すぐ南の土壌からは、2cmほどの小さな人形型をした石製品が発見されており、やはり、祭りに使われたものと考えられます。調査区中央部の旧河川跡より発見された土壌からは、小型の壺を中心に納めた壺がほぼ完全な形で出土しており、祭りのひとつの形を示していると思われます。

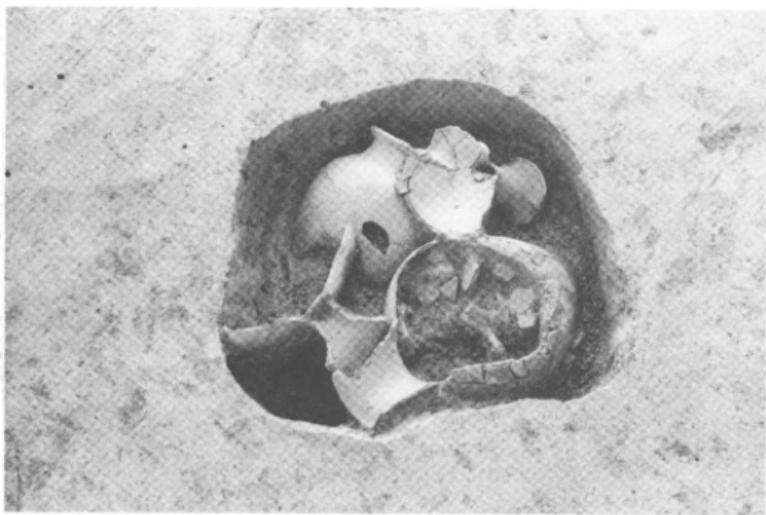
また、調査区の西端部で検出された旧河川の跡からは、銅鏡の破片ひとつが発見されており、住居址のひとつからも同じ種類の銅鏡の破片が発見されました。この銅鏡は、方格規矩四神鏡^{ほうかくきくしきしんじょうきょう}といわれる中国製の鏡（42ページ参照）であり、いづれも1%ほどの破片でした。当時は、中国製の銅鏡といえば、非常な貴重品であり、特別な力をもっていたと考えられていたようです。ですから、この鏡片も力の象徴であり、このむらを治めていた首長の権威の象徴として、祭りなどに使われたと考えられます。しかし、銅鏡を象徴とする祭りはいつまでも続きません。後期になると、新たな祭りの道具をもつ社会に変ります。そして、鏡片は村はずれの河川やこわれた住居跡に捨てられたのです。



旧流路のひとつから発見された銅鏡片



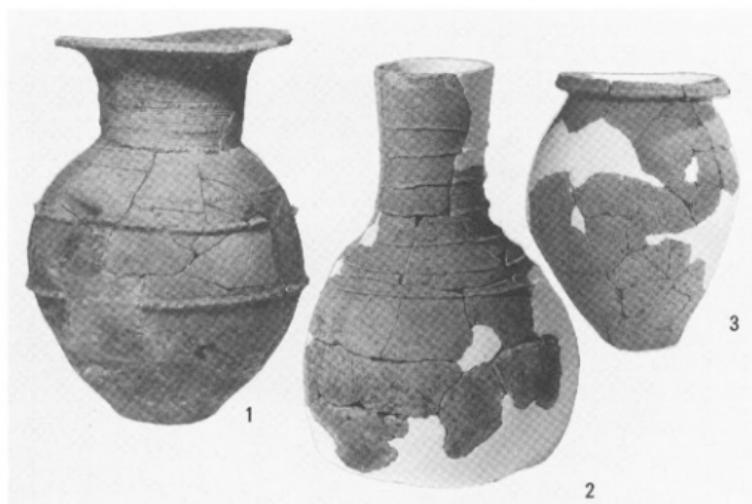
土壌のひとつから発見された小形壺を中心とした壺



土壤から発見された土器
壺と甕各1個と高杯2個が土壤の中に埋納された状態です。



上の土壤から出土した土器
(1 壺、2 甕、3・4 高杯)



たくさんの文様により飾られる中期の土器
(1・2 壺、3 麽)



文様の少い簡素な後期の土器
(1 壺、2 壺、3 高杯、4 小型の椀)

出土する土器は、前期にくらべ、中期になると次第に各地域の特徴をもち始め、さまざまな装飾や形をもった土器が各地で生まれ、変化に富んでいます。弥生時代の中では、最もはなやかな土器の時代といえます。ところが、後期になると中期の土器のような地域差はなくなり、再び前期のように、全国的に同じような土器になります。土器の装飾もなくなり、作りも粗くなります。

この変化は、当時の社会の変化を現わしているのです。中期には、各地で力をもったむらが現われ他のむらを支配下におき、小さな「くに」が形成されます。そして、それぞれの「くに」で独自の社会が育ち、この姿が土器に現われているのです。

これらの「くに」の間では、さらに力を広げるために戦いが始まります。この戦いは、石鎧(石の矢じり)の変化にもみることができます。前期では、狩猟に使われていた弓矢も、中期になると戦争の道具として使われ始め、威力を増すために矢じりが大型になってきます。

後期になると、むらの統一が進み、より大きな「くに」が出現します。そうすると、土器も同じような形に統一されてくるのです。高知県でも、後期の後半になると印目(1ページ参照)をもつ土器が、多量に発見されるようになります。これは近畿地方の影響を受けた結果です。また、後期の土器には、前期、中期にはみられなかった小型の椀が出現します。この椀は、銘々器と呼ばれ、個人がそれぞれ使う食器であり、ここにも、次第に発展する弥生時代の姿をみることができます。

さらに、石器においても、さまざまな変化を読み取ることができます。稻を刈る道具である石包丁も、前期、中期には磨製であったものが、後期になると粗雑な打製石包丁となり、数も少なくなります。これは、鉄器の普及により、鉄鎌が広く使われるようになるからです。他にも鉄斧の出現によって石斧はその役目を終え、後期ではほとんど出土しません。

このように、中期は弥生文化の発展期であり、前期からの伝統をもちつつ、地域の独自性をみせます。後期は、さらに弥生文化が進み、古墳時代への社会の変化をその中にみることができます。

3 すまいとむら

田村遺跡群で発見された遺構と遺物から弥生時代をみてきましたが、さらに具体的に当時の人々の生活を探ってみましょう。

遺構では、前期から後期までのむらが発見され、当時のいろいろな住居や倉庫の様子がわかりました。

住居の中心となるのは竪穴住居です。竪穴住居は、名称のとおり地面を約40～50cmほど掘り下げ、屋根をかけたものであり、西日本では縄文時代から古墳時代まで使われました。竪穴住居の形には、円形と方形がありますが、弥生時代はほとんど円形であり、古墳時代になると方形に変化し、カマドをもつようになります。これは、住居の構造が変化したためと考えられます。

竪穴住居の住みごこちはよかったですのでしょうか。地面を掘り込んでいるので、冬は暖かく、夏はすずしかったものと考えられ、現在想像するよりも快適な住居であったと思われます。しかし、欠点としては湿気が多く、梅雨の時などはジメジメしており、やはり暮しにくかったのではないでしょうか。

掘立柱建物は、竪穴住居とちがい地面に直接柱を建てて屋根をふいたものであり、中国大陸から伝わってきた住居です。今まででは、掘立柱建物が発見される



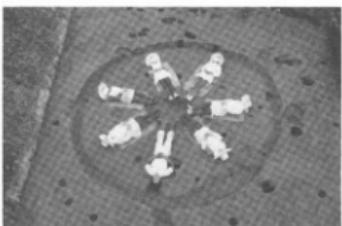
円形竪穴住居址



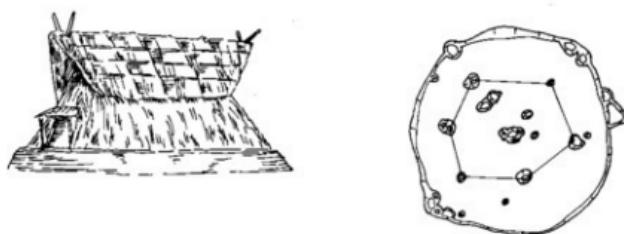
方形竪穴住居址



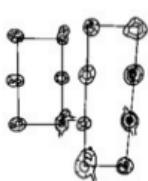
掘立柱建物址



竪穴住居址に寝てみる。



右の堅穴住居址は 6 本の柱で建てられます。(最古のむら)



左の高床式倉庫は 2 棟が並んで建てられます。(最古のむら)

第 6 図 堅穴住居址と高床式倉庫の復元想像図

と、登呂遺跡（静岡県）で復元されているような高床式の倉庫と考えられていました。田村遺跡群のように、 $6 \times 12\text{m}$ と大形であり、9棟もまとまって発見されることから、住居と考えた方がよいようです。また、柱の太さは20cm以下ですので、高床式ではなく平地式のようです。

ところで、1棟の住居には、何人の人間が住んでいたのでしょうか。むらの人口、家族の構成など不明な点が多いので、確実なことはわかりませんが、1人の人間が寝る時に占める面積を 3 m^2 とすれば、生活のスペースなどを加えると、普通の住居では5~6人の人間が生活していたようです。この人数からみれば、1棟の住居に1家族が住んでいたと考えられます。この計算でむらの人口を推定すると、前期の最古のむらでは30~40人、中期から後期のむらでは、住居址がすべて発見されませんが、100人以上の人口が考えられます。

このように、弥生時代のむらは、数十年の期間をおいて移動しています。物部川の洪水などによりむらや水田が流された時には、より住みやすい土地を選び、移つたのでしょう。

4 道具とくらし

弥生時代は、稲作文化を中心とする時代です。この新しい文化は、それまでの縄文時代の中から生まれたものではなく、中国大陆や朝鮮半島から伝えられた文化であり、縄文時代にはみられない新しい道具を日本へもたらしました。ここでは、いろいろな新しい道具をみながら、田村遺跡群の弥生人たちのくらしを探ってみましょう。

弥生時代の道具は、生活用具、生産用具、武器、祭りに使う祭祀用具に大きく分けることができます。祭祀用具については、次の「祭りと信仰」で述べますので、あとの生活用具、生産用具、武器についてみていきましょう。

生活用具

生活用具の中心は土器です。どんな遺跡からでも土器は出土しますし、最も出土量が多く、皆さんに親しまれています。時代を調べたり、当時の生活を探るうえでは欠かすことができません。

弥生時代の土器は、壺、甕、高杯、鉢の4種類からなっています。壺と高杯は、縄文時代ではほとんどみられず、弥生時代になって登場したものです。したがって、稲作の始まりとともに朝鮮半島から伝わり、作られるようになったのです。



土器の種類
(1 壺、2 甕、3 高杯、4 鉢)

壺には、大小さまざまな大きさのものがあり、時期や地域によって、形や文様が異っています。その用途もいろいろと考えられますが、最も多く使われたのはものを貯えることであり、秋の収穫が終るとたくさんの種粒が大きな壺に貯えられたのでしょう。また最古のむらの中で発見された、1m近い高さの大型壺は墓の棺（つぼかん）として使われており、ものを貯えること以外の用途も知ることができます。

甕は、食物を煮炊きする道具であり、今日の鍋や釜の役目をもつ万能の道具です。甕の多くは、外面にススが付いて黒くなったり、火を受けて赤く変色しています。そして内面をよくみると、米のお焦げが残っているものもみられ、煮炊きの様子を想像させます。また、甕の外面には、口縁部（土器の口の部分）を除きほとんど文様がありません。これは、壺が貯蔵に使われ飾られるものであったのに対し、甕は煮炊きに使われるためであり、用途の違いが文様の有無にも現われています。

高杯と鉢は、盛り付け用の土器です。高杯は特に祭りの時に多く使われたと考えられ、前期にくらべ、祭りが盛んになる中～後期の村では、たくさん出土します。

1棟の住居址から発見された土器を、細かくみていくと、壺2～3個、甕6～8個、高杯2～3個、鉢1～2個の割合で存在しており、これが、弥生人1家族のもっていた土器ということができます。

土器の他に、木で作られた生活用具がたくさんあるはずですが、残念ながら田村遺跡群では、すべて腐ってしまったとみて、弥生時代の木器を発見することはできませんでした。



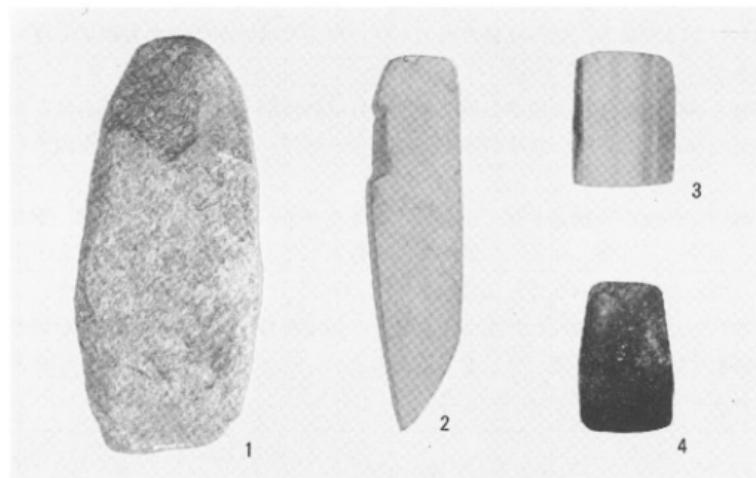
墓の棺として使われた大型壺。(高さ約70cm)

生産用具

弥生時代の生産用具として最も注目されるのは、金属器です。中でも鉄器を第一にあげなければなりません。しかし、今回の発掘調査では、鉄器は発見されませんでした。これは、鉄器の数が非常に少なかったためです。最初の頃は、非常な貴重品でしたので、欠けたり割れたりすると、鑄漬して再び鉄器とし、何度も利用しており、弥生時代も後期後半になるまでは、あまり普及しなかったようです。鉄器としては、鉄斧が最も多く入ってきたようです。鉄斧は、石斧にくらべ、刃はするどく、よく切れ、堅いので長持ちする万能の道具であり、木製の鍤や鋤を作る時には力を発揮したでしょう。このように、最初の鉄器は道具を作るための道具として使われていたのです。

次に弥生時代の道具の中心である石器についてみてみましょう。

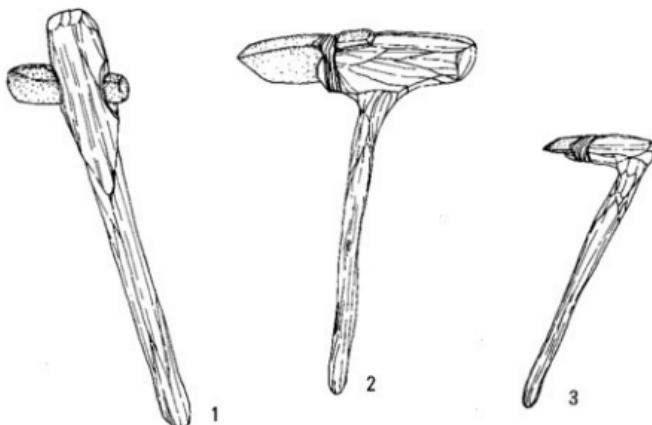
石器の中で最も量の多い工具としては、石斧をあげることができます。石斧は、ふとかくははまぐりばせきふ 太形蛤刃石斧、ちようじょうじりばせきふ 柱状片刃石斧、へんぺいかたばせきふ 扁平片刃石斧に大きく分けることができます。この形の違いは、石斧の用途の違いでもあります。太形蛤刃石斧は、木を切り倒したり、板状に割るのに使われました。竪穴住居を建てる木材や水田を仕切る板などは、この石斧を用いて作られたものです。扁平片刃石斧は、カンナの役



石斧の種類
(1 太形蛤刃石斧、2 柱状片刃石斧、3・4 扁平片刃石斧)

割をする道具であり、板や木器の表面を削り、なめらかにします。柱状片刃石斧は、木に穴をあけたり、溝を削るときに使用され、今日のノミの役割をはたしていた道具です。また、これらの石斧は、同じ石材で作られているのではなく、用途に応じて必要な石材が選ばれています。扁平片刃石斧には、最も鋭い切れ味が要求されるので、非常に硬い石材が使われており、今触っても手が切れるほどのものもあります。太形蛤刃石斧には、木を切り倒す時など強い力が加わるので、割れにくく、ねばりのある石材が選ばれています。これらの石斧は、いずれも磨製であり、稻作とともに朝鮮半島から入ってきたものです。

農具として最も目につくのは、石包丁です。石包丁は、稲穂を刈るための道具であり、弥生時代の稻作には欠かすことができません。当時は、稲を根元から刈らずに、実を結んだ稲の穂首だけを刈っていたのです。石包丁には、土器と同じように、時期によって形や作り方に変化がみられます。多くのものには、2個の穴があけられ、この穴に紐を通して指にかけ使います。最古の村から出土する石包丁は、三角形をしており、外湾する刃がつけられています。これが中期になると、長方形になり、刃は直線的になります。穴も1個だけのものもみられます。中期の終りから後期にかけては、それまでの磨製から、瀬戸内地方のサヌカイト



第7図 石斧の使用例
(1 太形蛤刃石斧、2 柱状片刃石斧、3 扁平片刃石斧)

を使った打製石包丁が使われます。打製石包丁には、穴はなく、両端に抉りを入れただけのものや、河原石を打ち割っただけの粗雑なものばかりです。そして、後期の終り頃になると、石包丁は完全に姿を消します。これは、石包丁にかわり、鉄製の鎌が広く普及した結果です。



前期の石包丁



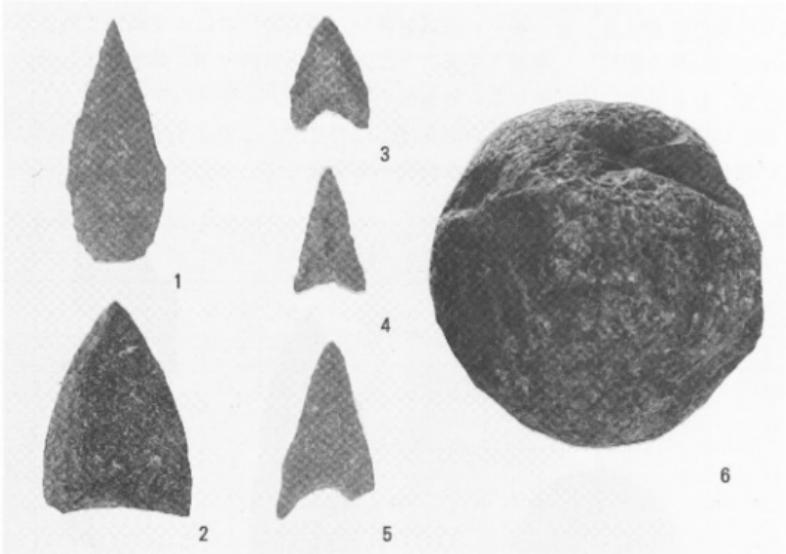
中期の石包丁



後期の石包丁

弥生時代は、稻作の時代ですが、それまでの狩猟や漁撈がなくなったわけではありません。狩猟具としては、石鏃（石の矢ヒリ）が多くみられます。石鏃は、サヌカイト製が多く、やはり瀬戸内地方から原石を運び、田村で作られたものです。ですから、住居址や土壙の中からは、サヌカイトの破片がよく発見されます。また、投弾もいくつか発見されました。投弾は、丸い石を2～3個紐でつなぎ、それを動物の足などに投げて捕獲する道具であり、弓矢が狩猟だけではなく、戦闘用の武器として使われたように、投弾も時としては、強力な武器として使われたと思われます。

漁具には、土製や石製の錘をあげることができます。土錘や石錘は、網に使用されるものであり、大型と小型のものがあります。大型の錘は、海で使われ、小型の錘は、投網のような軽い網に使われたと考えられます。



石鏃と投弾
(1・2 大型石鏃、3～5 石鏃、6 投弾)

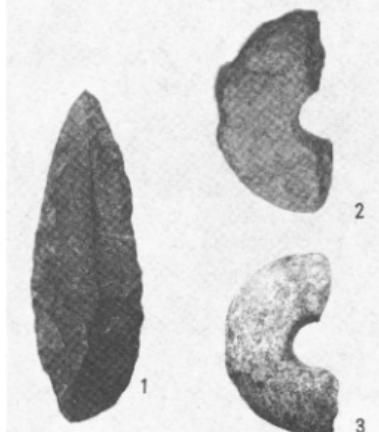
武 器

弥生時代は、「戦い」の始まった時代です。縄文時代まで武器はなく、弥生時代になって武器の出現をみます。先に述べたように、弓矢も強力な武器として使われます。山口県の土井ヶ浜遺跡からは、13本もの矢じりを一身に受けた人骨も発見されています。また、中期になると、石槍（最初に発見された時は、石の槍と考えられていましたが、最近の調査によれば柄をつけて短剣として使われていたことがわかっています。）と呼ばれる打製の短剣が現われて、白兵戦に使われました。さらに、環状石斧（かんじょうせきふ）というドーナツ状の石斧も武器として登場します。これらの石製の武器以外にも、鉄や青銅製の剣や矢じりが使われているのですが、やはり貴重品なので何度も再利用したと考えられ、発掘調査では発見されませんでした。

稲作とともに朝鮮半島から伝わった新しい道具は、短期間に全国的に広がり、人々の生活を変えました。新しい道具を使い、縄文時代には人々が振り向きもしなかった土地を開墾し、水田とすることにより、人口は一気に増加しました。そして、むらの間には、より多くの水田や鉄器をめぐって戦いがおこり、ここでも新しい道具としての武器が威力を發揮したのです。このように、弥生時代は新しい道具をもつことにより、新たな時代へと発展していったのです。



紡錘車

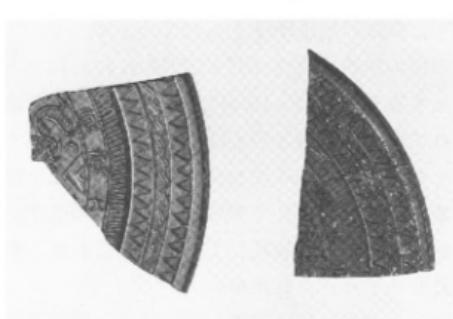


石槍と環状石斧
(1 石槍、2・3 環状石斧)

5 まつりと信仰

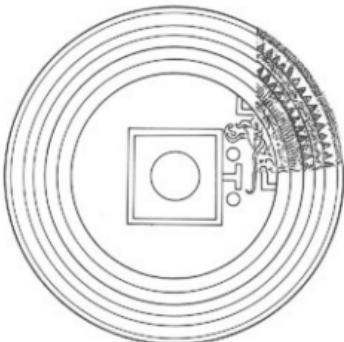
私たちは、現在多くの祭りと信仰をもっていますが、弥生時代にもたくさんの祭りと信仰があったはずです。弥生人たちは、より豊かで安定した生活をおくるために祭りを行い、祈りをささげたのです。これは、弥生人たちの精神生活の現われといえるでしょう。この面においても、弥生時代は大きな変化があった時代です。すなわち、農耕社会にふさわしい「まつりと信仰」のすがたが中国大陸、そして朝鮮半島から伝わって来たのです。

縄文時代は、自然と強く結びついていた社会であり、山や川、木や石などの自然そのものを神として祭り、生や死に関連した信仰が中心となっていました。ところが弥生時代になると、生産の中心である農耕にともなう祭祀儀礼が新しいまつりと信仰となったのです。1年を通じ、春にはもみを播き終えたとき、夏には日照にならないように、秋には稲の収穫とともに稻作に関連する祭りが、行われるようになりました。また、水田に水を引く水路、堰、池、川などに対する祭りや信仰も始まります。これらの農耕に関する仕事は、すべてむらの共同作業で行われてました。そして、そのための祭りも村人全員によって行われるのですが、その中から祭りをつかさどる中心人物である首長が生まれます。首長は、祭りを通して政治性をおび、政治と祭りが深くむすびついていきます。



銅 鏡 片

方格規矩四神鏡と呼ばれる中国製の鏡の破片
が出土しました。



第8図 鏡片の復元図